

陸 靖穎（ル ジンイン）

中国出身／2019年度奨学生

日本女子大学 文学部日本文学科

私はこの3月にやっと大学卒業証書を取得でき、長い日本での留学生活を終わります。すでに帰国した今、過去5年間の留学生活を振り返ると、嬉しい気持ちも懐かしい気持ちも、胸いっぱいに溢れます。

留学して、自分のなかで一番変わったことと言えば、自分の行動に対して責任をとるという、人間として基本的な姿勢ができたことです。留学前の私は、なんでも親を頼りにしていました。留学の複雑な手続きさえ親にしてもらい、私はサインだけをして、チケット1枚で日本にきました。日本に来てから、大学の選択、出願、学習時間とプライベートの時間の管理など、全てのことを自分で決断し、責任を取らなければいけないことになりました。最初はバタバタしていましたが、試行錯誤を何度も繰り返すなかで責任感を養っていきました。奨学金の申請、ビザの更新などの複雑な手続きを抜け漏れなくできるようになりました。

留学2年目から、留学生数が少ない日本女子大学に入学し、周りの日本人と同じ授業を受け、しっかりと勉学に励みました。日本語を学ぶ授業は少しあるもの、その他の専門科目は全て日本語で日本人と一緒に受けます。1年生の時、授業のコメントさえうまく書けない私でしたが、今では物事を多角的に分析し、自分の主張を論理的に論文に書けるようになりました。全ての授業の中で、日本語古文と変体仮名の勉強がとても難しく、理解出来るまで一番時間がかかりました。試験が近づくと半泣きになりながら、先生や友人の所へ行き、分からぬところを教えてもらうなど、大学内を駆け回る日々でした。焦ったり、諦めそうになったりする瞬間もありましたが、幸いに努力が実りを結びました。成績通知書を見た時の嬉しさはとても忘れられません。乗り越えられない山はないとその時悟り、ますますやる気が出てきました。

そして、キャンパス生活においても、充実に過ごしました。2年生の時、日本語学の田辺先生の励ましを受け、私は自主ゼミ（授業とは別に、学生が自発的に企画する勉強会）の国際交流ゼミでゼミ長を務めさせていただきました。留学生と日本人の学生を集め、日本文化を体験できる観光地を見学するのがこの自主ゼミの主な活動です。この活動を通して、日本人の学生と外国人留学生は、日本や母国の風俗、文化の差異などについて話し合い、お互いの文化への理解が深りました。自主ゼミ長になってから、企画を作成、実行することや、部員に指示を下すことは、今まで経験したことがない役割だったので、とてもいい経験になりました。自分のリーダーシップとコミュニケーション能力が鍛えられたと思います。

このように生活面においても勉強面においても、今の私は留学する前のわたしと比べて、はるかにたくましく、また人間的にも大きくなつたことを実感しています。多くの人々と関わり合い、充実した留学生活は、私にとって貴重な時間でした。

大学最後の1年間、坂口国際育英奨学財団にお世話になりました。坂口財団が経済的に助けてくださったことで、わたしは生活面に悩むことなく、学術に専念することができました。この場をお借りして、感謝の意を申し上げます。一時帰国をしたために坂口国際育英奨学財団の財団行事には4回しか参加できませんでしたが、毎回学ばせていただいたと感じています。日本の伝統芸術歌舞伎の美しさ、富士講の信仰の力、葛飾北斎の何歳になってもチャレンジする精神など、大和民族の魂に少し触れることができました。

財団活動の諸項目の中、わたしにとって最も有意義だったのは食事会のトークタイムでした。普段知り合った日本人は同世代の学生だけで、社会人と接するチャンスがほとんどありませんでした。食事会のトークタイムで、坂口財団関連者、佐倉の坂口電熱系列企業の従業員、弁護士の先生など、いろいろな日本の社会人と話し、意見・観点を交換しました。しかし、やはり多少の世代ギャップがあるため、学生同士のようにただ話し合うだけでは物足りない、相手のことを理解して適切に話しかける能力も不可欠であることに気づきました。知見をもっともっと広げなければいけないと意識していました。そして、目上の方と会話する場合、自分の意見を発表するよりも、人の話に耳を傾けて、相手が何を考え、求めているかを察する能力も大事だと思います。社会に出ると、このように色々な年代の方とお会いする機会が多くなると思いますので、坂口財団の方々との交流会はとても良い事前練習であり、これが自分の将来にも直結すると考えます。財団活動をきっかけに、私は予備社会人として社会へ探りを入れる一歩を踏み出したとも言えるでしょう。

先日、中国湖北省武漢市に新型コロナウイルスが発生して、マスク、防護服の不足に緊急事態になった時、中国語検定試験「HSK」の日本事務局が武漢市に『山川異域、風月同天』のメッセージを添えた支援物資を届けてくれました。この漢詩の意味は；山と川が違っても、同じ風が吹いて同じ月を見る。まさに日本と中国両国の絆を示す一言だと思います。昔から、日本人と中国人の考え方には儒家思想が通底し、たくさんのが似通っているので、兄弟のように、助け合うべきだと思います。

最近は、日本でも新型コロナウイルスの感染が拡大してしまいました。日本でウイルス検査キットが不足していることを知り、中国側はウイルス検査キットを日本国立感染研究所に無償で提供しました。ウイルスは人々に不幸をもたらしますが、日本と中国がウイルスとの闘いを機に、信頼関係を築いて、これからもお互いの絆は一層深まっていくでしょう。両国が手を携えてからこそ、より早く勝ち抜くことができる信じております。日本は中国と「近くて遠い国」とよく言われますが、「近くて親しい国」になる日は遠くないでしょう。最近は新型コロナウイルスの件で、就職活動が先延ばしになりましたが、日本での留学経験を生かして、中国にある日系企業に就職するつもりです。今後は日本からの帰国留学生であることを誇りに持ち、日本で培った知識、コミュニケーション力を活かして、社会に貢献できるよう努めています。そして、微力ながらも、両国の友好関係に力を差し上げたいです。

私をこれまで育んできてくれたこの日本に、心からお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。